

# 兎が火に飛び込む話の日本版

—他のヴァージョンにはない発想と筋運び—

小林 信彦\*

「兎が火に飛び込む話」はブッタが前世で行ったことを伝える有名な話である。この話はインドから見れば遥か東の果てに位置する日本にも伝わっている。12世紀初頭の日本で成立した『今昔物語集』に第5巻13話として収められている説話がそれである。<sup>1)</sup> インドと中国に伝わる話と比べると、この日本版には大きな違和感を禁じえない。

何匹かの野生動物がいっしょに暮らしていて、訪れた人をもてなそうとするが、草しか食わない兎だけは、人間が食える物を持って来ることができず、火の中に飛び込んで自分の身体を焼き肉として提供する。このように話の大筋が似てはいるにもかかわらず、日本語版だけは全体の流れがまるで違うのである。

仏教で伝えられる話から借りたプロットを用いながらも、そして仏教文献から借りた語句をあちこちで用いながらも、「兎が火に飛び込む話」の日本版は、インドと中国で受け継がれてきたジャータカ (jātaka) の伝承と比べて極めて特異な点があり、日本独特の雰囲気を生み出す作品となっている。

このような作品を扱う場合、中国文献から継承した表現やアイデア以上に注目すべきは、そこに対応を欠く記述である。日本版で無視されている

---

\* 本学文学部

キーワード: 誠の心, 菩薩, 兎焼身, 帝釈天, 前世物語

個所と日本版にしか見られない箇所こそ、日本人の意図するものが表現されていると言えよう。

## A1

### マコトノココロを起こした三匹の獣たち

『今昔物語集』の第5巻第13話の冒頭では、この話に登場する兎と狐と猿が紹介されている。物語の語り手はこの3匹の特異な生活態度に言及して、マコトノココロ（誠ノ心）を起こしてボサツノダウ（菩薩ノ道）を行っていたと言うのである。

今ハ昔、天竺ニ兎・狐・猿、三ノ獣有テ共ニ誠ノ心ヲ<sup>ラ (s i c)</sup>菴コシテ菩薩ノ道ヲ行ヒケリ。<sup>2)</sup>

これに続いて、マコトノココロを起こした3匹の獣の生活態度が具体的に説明される。“年寄りを親のように敬い、少し年上の人を兄と思い、少し年下の人を弟のように可愛がる”と言われ、“自分のことを放っておいて、他人のことを心配する”と集約される。

年シ、我ヨリ老タルヲ<sup>オヤ</sup>祖ノ如クニ敬ヒ、年、我ヨリ少シ進ミタルヲバ兄ノ如クニシ、年、我ヨリ少シ劣タルヲ<sup>オトリ</sup>バ弟ノ如ク哀ビ、自ラノ事ヲ<sup>サキ</sup>バ捨テ、他ノ事ヲ前トス。<sup>3)</sup>

3匹の野生動物はこのように立派な生き方をしているのであるが、これは人間の間でさえめったに見られることではない。人間にも酷いことをする奴が多いのに、獣でありながらマコトノココロがこれほど深いのは信じ難く、この獣たちの行いを見て、タイシャクテン（帝釋天）は大いに驚くのである。

此等、獣ノ身也ト云ヘドモ、<sup>アリガタ</sup>難有キ心也。人ノ身ヲ受タリト云ヘドモ、或ハ生タル者ヲ<sup>イキ</sup>斂シ、或ハ人ノ財ヲ<sup>コロ</sup>奪ヒ、或ハ父母ヲ<sup>タカラ</sup>斂シ、或ハ兄弟ヲ<sup>コロ</sup>讎敵ノ如ク思ヒ、或ハ<sup>アタカタキ</sup>咲ノ内ニモ<sup>エミ</sup>悪シキ思ヒ有リ。或ハ<sup>コヒ</sup>戀タル

## 兎が火に飛び込む話の日本版

形ニモ<sup>イカ</sup>嘖レル心深シ。何况ヤ、如此ノ<sup>イカニイハムヤ</sup>獣ハ、<sup>カクノゴトキ</sup>實ノ<sup>マコト</sup>心深ク難思シ。<sup>オモヒガタ</sup>4)

このように獣たちの生き方を描写する箇所は、『今昔物語集』に伝えられるヴァージョンにしか見られない。日本ヴァージョンの語り手は、外のどこにもない記述を持ち込んでいるのである。仏教で伝えられている説話では、“自分のことを放っておいて他人のことを心配する”という生活態度が人間の究極目的とされることはない。

すべての仏教文献で究極目的とされるのは「究極の真理に到達してブツダ (buddha) になること」である。仏教で伝えられている「兎が火に飛び込む話」に登場する兎について問われているのは、「究極の真理に到達してブツダになる決心」(cittotpāda/發[菩提]心)<sup>5)</sup> をしているかどうかである。

ところが、『今昔物語集』5.13には「ブツダになる決心」を試すような記述はどこにも見られない。日本のタイシャクテンも、仏教のインドラ (indra) と同じように何かを試そうとしてはいるのであるが、テストの対象が仏教ヴァージョンの場合とは違うのである。ここで日本のタイシャクテンが試そうとしているのは、マコトノ-ココロである。

〔人ノ身ヲ受タリト云ヘドモ、……〕 何况ヤ、如此ノ獣ハ、實ノ心深ク難思シ。然レバ<sup>ココロミ</sup>試ム。<sup>6)</sup>

すでに冒頭の文に“マコトノ ココロヲ オコス”という表現がある。これが踏まえているのは、“ココロヲ-オコス”という表現であり、<sup>7)</sup> もともと中国語の仏教術語“發-心”の日本語訳であるが、『枕草子』や『源氏物語』にも見られ、<sup>8)</sup> 日本独自の用法展開が跡付けられる興味深い語である。<sup>9)</sup> この話でキーワードになっているのは、他動詞“オコス”の目的語“マコトノ-ココロ”である。「兎が火に飛び込む話」の日本版では、「ブツダになる決心」について問われているのではなく、マコトノ-ココロについて問われているのである。

仏教の教えによると、「心」(vijñāna/識)が消滅すると「轉生」<sup>10)</sup>が断たれ、永遠に続く苦しみから解放される。<sup>11)</sup>これが「ブツダになること」であるが、この究極目的は遥かに遠い未来に設定されていて、限りないほど「轉生」を繰り返した後でやっと達成することができる。仏教で説かれていることは超日常的 (lokottara) であり、人々に優しくして世の中を良くすることなどは、ブツダになるための手段であっても目的でない。そして、この途方もなく長い作業過程の出発点が「ブツダになろうとする決心」である。

ところが、日本で伝えられる「兎が火の中に飛び込む話」に登場する獣たちが立派なのは、優しい思いやりを示すからに外ならず、このことはブツダになるという超難事業と関係なく語られている。“自分のことを放っておいて他人のことを心配する”ことは、“人間の間でさえめったに見られることではない”にしても、マコトノ-ココロが発現されるのは日常生活の中のことであり、それを前提にして到達すべき目標が遠い未来に設定されているわけではないのである。

このように、『今昔物語集』に伝えられる「兎が火の中に飛ぶ込む話」では、「ブツダになる決心」がマコトノ-ココロと置き換えられた結果、「限りなく生涯を繰り返して努力を続ける」というブツダになるための条件が伝わらなくなり、仏教の基本構想は消え、仏教伝承との繋がりは失われた。

パーリ版『ジャータカ』(jātaka)<sup>12)</sup>のヴァージョンでは、仏教の信者にふさわしい生活を送ろうと、この賢い兎 (sasa-panḍita) が猿とジャッカルと川獺に呼び掛ける。「[惜しみなく]物を与えること」(dāna/布施)を行い、日々の生活で「心掛け」(sīla/戒)を守り、決められた日にウポーサタ (uposatha/布薩)に参加しようというのである。<sup>13)</sup>

「真理の世界へ行くための実践項目」(pāramitā/波羅蜜)が六つあり、<sup>14)</sup>

## 兎が火に飛び込む話の日本版

ブツダになるのに欠かせない。そののうち一番目に挙げられるのが「物を与えること」である。そして、次に挙げられるのが「心掛け」(sīla/戒)であり、「動物を殺さないように気を付けること」や「盗まないように気を付けること」など、基本的項目が五つ定められている:「五箇条の心掛け」(pañca-sīla/五戒)。

そして、日頃は生計を立てるための仕事や家庭生活に追われて暮らしている人々は、半月に3回ウポーサタに参加して、「セックスをしないこと」や「正午を過ぎたら飯を食わないこと」など8項目の戒めを守って、一昼夜にわたって修行者のように時を過ごす (atṭhaṅga-samannāgata uposatha/八支齋)。これはブツダの教えに従う者の義務である。

パーリ版『ジャータカ』に採録された「兎が火に飛び込む話」は、兎が外の3匹にも実行させようとして最初の挙げる「[[惜しみなく]物を与えること」の実践記録である。遙か未来にブツダになろうとして、インドの兎は準備活動をしているのである。このような生涯を限りないほど繰り返して、この時に兎の身体に宿っていた「心」は、やがてシャーキヤ部族国家の元皇太子の身体に入り、ついにブツダになることができたのである。

ところが、日本の獣たちはウポーサタを行わないし、自覚して「心掛け」を守ることもない。三匹の動物の行動に言及して、日本ヴァージョンで“カイ”(戒)という語が使われることはなく、「心掛け」を守っている振りをすることさえない。<sup>15)</sup> 日本の兎は仏教の信者にふさわしい生活を送っていない。ブツダになるつもりがないのである。

## A<sup>2</sup>

### マコトノココロの真偽を試そうとするタイシャクテン

このように、日本ヴァージョンで「ブツダになる決心」の代わりに試されるのはマコトノココロである。この説話の文脈から見ると、マコトノ

ココロは他人を思いやる優しい振る舞いとして発現する。“マコト”と言うからには、うわべを取り繕う可能性が常にあり、タイシャクテンは試す必要があったのは、見かけだけからは容易に認知できないからである。

獣たちの立派な行いを見て、タイシャクテンは驚嘆しながらも、直ぐには信じない。“人間にも酷いことをする奴が多いのに、獣でありながらマコトノココロがこれほど深いのは信じ難い”と言うのである。そこでテストをして真偽のほどを確かめようとする。<sup>16)</sup>

インド文献『ジャータカ』に登場する神々の王インドラ (indra/帝釋天)<sup>17)</sup> は、兎が本気でブツダになろうと決心したのかどうか疑う。そこで、ブラーフマナ (brāhmaṇa/婆羅門) の姿でやって来て、兎の決心を試そうとする。インドラの到来に先立って、この兎は身体を捨てる覚悟を決めている。<sup>18)</sup> このことを知ったからこそ、<sup>19)</sup> インドラは直ちに地上に降りて来るのである。

仏教で構想された世界では、すべてが「行いと報いの対応法則」<sup>20)</sup> に基づいて進展するので、極端な「善い行い」(subha-karman/善業)には極端な「楽しい報い」(sukha-phala/樂果)がもたらされるはずである。この極端な「善い行い」をして兎は何を目指しているのか。これこそインドラが知りたいことであり、地上へ降りて来た目的である。

ところが、日本では事の進展が「行いと報いの対応法則」を前提するわけではないので、三匹の動物が感心な暮ら方をしているのは、それにふさわしい「報い」を期待しているからではない。したがって、3匹の動物あるいはそのうちの1匹に未来に達成すべき目的があるわけではないし、タイシャクテンがそれを知るすべもない。仏教のインドラのような強い動機がタイシャクテンにあるわけではない。

仏教世界では、すべてが「行いと報いの対応法則」に基づいて進展するので、極端な「善い行い」には極端な「楽しい報い」がもたらされるはず

## 兎が火に飛び込む話の日本版

である。何の目標があって、兎はこの法外な「善い行い」を行うのか。これがインドラの抱いた疑念である。インドラが最初に疑ったのは、この兎が自分の後釜を狙っているのではないかということである。「善い行い」の最終結果である「楽しい報い」の中で最も得るのが困難なのは「ブッダになること」であり、次に困難なのは「インドラになること」である。

極端な「善い行い」をする者がいる場合、ブッダになりたがっているの でなければ、インドラになりたがっていることになる。兎の目標がインドラになることではなくブッダになることであると知って、インドラはすっかり安心して天国に帰った。

インドラを始め、天国 (svarga) に住む神 (deva) は、インド正統宗教の神話で不死 (amṛta) である。ところが、途方もなく長い寿命ではあるにしても、仏教で不死はありえず、神もいつかは死ぬことになっている。その時になると、インドラの身体に宿っていた「心」はどこかへ去り、新インドラ用の身体が新たに発生して、そこへ別の「心」がはいり込む。

もしインドラの危惧する通りであるとすれば、今のように兎が極端な「善い行い」を続けているのは、いつかインドラになるための準備であるということになる。兎は今のように極端な「善い行い」を続け、さらに「轉生」の度に同じような生涯を繰り返すと、やがてはインドラになるのに十分な質と量の極端な「善い行い」が蓄積され、今は兎の身体に宿っている「心」が新インドラの身体に移動することになる。そうすると、インドラの交替が起こり、現インドラの身体に宿る「心」は地上世界に戻されて、人間あるいは人間以外の動物の身体に移動しなければならない。

ところが、「行いと報いの対応法則」が信じられていない日本には、このような状況がない。3匹の動物が感心な暮ら方をしているのは、遙か遠い未来に達成すべき目的があるからではない。そうすると、後釜を狙う者の存在が気になるインドラの場合と違って、日本のタイシャクテンには自

分の身にかかわる差し迫った問題があるわけではない。

獣たちがボサツノダウ（菩薩ノ道）を実践しているを見て、日本のタイシャクテンが何を疑ったのかというと、そのマコトノココロが本物かどうかということである。この説話で“ボサツ”（菩薩）と呼ばれているのは、マコトノココロを備えた存在であり（“誠ノ心ヲヲコシテ菩薩ノ道ヲ行ヒケリ”<sup>21)</sup>）、「ブツダになろうと決心した存在」ではない。

## B<sup>1</sup>

### 私欲が混じらないひたむきな思い

マコトノココロを備えた者の行動原則は、『今昔物語集』の巻5第13で、“自ラノコトヲバ捨テ、他ノ事ヲ前トス”<sup>22)</sup>という言葉で説明されている。そして、これと同じ理念を表すと日本人が思い込んでいたのは、「ボーディサットヴァとしての行動」を意味する仏教術語“菩薩行”（bodhisattva-caryā）であり、巻6第19の末尾には、次のような言葉が見られる。

然レバ誠ノ心ヲ<sup>オコ</sup>蔽セル人ハ、我ガ出離<sup>ハカリコト</sup>ノ計ヲバ暫ク止メテ、先ヅ他ヲ利益スル事、此ノ如シ。コレヲ佛ハ、菩薩ノ行ト説キ給ヘル也トナム語り傳ヘタルトカヤ。<sup>23)</sup>

“出離”（naiskramya）は仏教術語であり、「苦しみの世界から離脱してブツダになること」を意味する。そして、「自分自身がブツダになるのはしばらく待っても、まず人々がブツダになるのに協力すること」は、ボーディサットヴァ（ブツダになろうと決心した者）の義務である。

ところが、ここで日本人が先ずしようとしているのは、「他人がブツダになるのに協力すること」ではなく、単に「他ヲ利益スル事」である。マコトノココロを起こした日本人のやるべきことは、他人のためになることをであり、その人が何を目指して生きているかは問わない。日本文化圏

## 兎が火に飛び込む話の日本版

で活躍するボサツの条件は、腹を減らしている人に飯を食わしてやること、病気で苦しんでいる人を治療してやること、すなわち困っている人の面倒を見ることに尽きる。

インド文化に根差すジャータカやアヴァダーナ (avadāna) は、「ボーディサットヴァとしての行動」を描く物語であるが、日本で“仏教説話”と呼ばれているのは、マコトノココロを起こした者が人に尽くす物語である。中国文献から借りた“出離”という術語は飾りでしかない。

日本のカミ（神）には特異な習性があり、ひたすら汚れを憎み、清らかさをこよなく愛する。そして、不純な気持ちには激怒するが、「私欲が混じらない純粋な気持ち」には異常なまでに動かされる。この習性を利用して、日本人はマコトノココロでカミを操り、自分の願いを実現しようとする。『今昔物語集』には“ブツ”（佛）とか“ボサツ”（菩薩）とか呼ばれている超越者がよく登場するが、その正体は純粋好みのカミである。仏教のブツやボーディサットヴァなら、人々が心を消滅させる準備をするのに協力を惜しまないけれども、それ以外のことでひたむきに思い詰めたところで、いささかも動じることがない。

巻5第11の説話は、ショブツ-ニョライ（諸佛如来）がマコトノココロに反応して奇跡を起こす話である。500人の商人が山道で遭難して、水がなくなって死にそうになり、同行の見習い僧に助けを求める。人々に頼まれた見習い僧は、ありとあらゆるブツ（佛）、ジフハウ-サンゼ-ショブツ-ニョライ（十方三世-諸佛如来）に祈願しつつ自分の頭を岩にぶっつけた。すると、流れ出した血が水に変わった。こうして、三日間も水を切らして死にかけていた人々が救われた。<sup>24)</sup>

この話の中で、助けを求められた見習い僧は、“<sup>マコト</sup>實ノ心ヲ<sup>ヲコ</sup>蔑シテ助ケヨト思フカ”と商人たちに問い質す。<sup>25)</sup> 商人たちと見習い僧の間には共通理解があって、マコトノココロをもってすれば、死に瀕している人々も救

えるというのである。この500人の商人たちは死にたくないと思っているだけで、ブッダになる決心などしていない。そして、この見習い僧も遭難を防ごうとしただけで、商人たちがブッダになる準備をするのに協力しようとしているわけではない。

したがって、この説話で語られているのは、「他ヲ利益スル事」ではあっても、「ボーディサットヴァの活動」(bodhisattva-caryā/菩薩行)ではない。そして、マコトノ-ココロを發揮して人命救助をした見習い僧は、世のため人のために尽くす呪術専門家ではあっても、ボーディサットヴァ(菩薩)ではない。ありとあらゆるショブツ-ニョライは、マコトノ-ココロに反応して災難を除く日本のカミではあっても、ブッダになろうと決心した人々を助けるブッダではない。

「ボーディサットヴァとしての活動」はブッダになろうと決心した者の行為であり、ブッダになるための準備活動として行われる。他人がブッダになるのを助けることは、自分がブッダになるために満たすべき条件なのである。そして、マハーヤーナ(mahāyāna/大乘)で構想されたブッダたちは、ブッダになった後も初心を忘れない。「心」を消滅させてブッダになる決心をしていなければ、そして他の人々がブッダを目指して頑張るのを助けようとしなければ、いくら「先ヅ他ヲ利益スル事」に励んだところで、“菩薩行”とは言えない。

しかしながら、日本人はブッダになるつもりなどないから、「ボーディサットヴァの活動」に興味がない。仏教文献から借用した“菩薩行”という語は、「先ヅ他ヲ利益スル事」を指すと理解され、さらには「超越者を動かして世のため人のために自ら超自然力を發揮すること」を指すことになった。外来語としてこの語は日本語の語彙に定着したけれども、「ボーディサットヴァの活動」という概念が定着することはなかったのである。

なお、“實ノ心ヲ菴シテ助ケヨ”という言葉があるところから見て、何

## 兎が火に飛び込む話の日本版

か超自然現象が必要となるごとに、マコトノココロを発現させるようである。ボサツノダウを続けているうちに備わったマコトノココロは普段は潜在していても、人間の力では解決が不可能な事態に際して、絶体絶命の危機を何とか切り抜けようと強く思い詰めると、突然これが発揮されるらしい。

## B<sup>2</sup>

### 個人的に有利な状況をもたらすひたむきな思い

『今昔物語』巻16第37の話には、マコトノココロを尽くしたお陰で裕福な身分になった男のことが語られている。超越者がマコトノココロに感動して奇跡を起こし、特定の個人に有利な状況をもたらしたのである。このように、「先ヅ他ヲ利益スル事」が語られていなくても、日本人にとっては「仏教説話」である。

清水寺に2000回も参詣をした男が博打に負けた。ところが、渡すべき物がない。そこで、2000回にわたって参詣したという実績と引き換えに、負け分を帳消しにしてもらおうと申し出た。譲り状を書いて観音像の前で誓うことを条件に、博打に勝った男はこれを受け取る。ほどなく渡した方は事件に巻き込まれて逮捕され、受け取った方は資産家から嫁を貰って豊かになり、任官することもできた。<sup>26)</sup>

二千回参詣の実績を勝ち分として受け取った際に丁寧な手続きをとったことが“誠ノ心ヲ至シテ請取タリケレバ”と言われる。このようにしてマコトノココロを示したので、クワンオン（観音）が感心したのである（“誠ノ心ヲ至シテ請取タリケレバ、観音ノ哀レト思シ食ケルナメリトゾ”<sup>27)</sup>）。受け取った男はこの際に願い事をしたわけではなく、マコトノココロと交換に何かを要求したわけではない。超越者が一方的にマコトノココロに感動したのである。このように、仏教の教えを伝えていると

日本人が思い込んでいる話の多くは、マコトノココロが発動して引き起こされる奇跡の物語である。

マコトノココロに反応して奇跡を引き起こすのは、“ブツ”や“ボサツ”と呼ばれるカミである場合が多いが (a),<sup>28)</sup> タマが宿るものなら何でもよい。生命のない物体も、日本の文化伝統ではタマが宿ることになっているので、マコトノココロに反応して奇跡を引き起こすことがある (b)。例えば巻10第19の説話には、次のような出来事が語られている。

ある男が遠い国へ行くことになり、留守中に外の男に近づかないよ  
うに言って、鏡を半分に分けて片方を妻に渡し、もう片方を自分が  
持って出発した。やがて、妻は外の男と仲良くなった。すると、妻の  
手元にあった鏡の片割れは、たちまち空を飛んで行き、男の持っている  
片割れとくっついて一つとなった。<sup>29)</sup>

男は留守中の妻が気になってしかたない。思い詰めた者のマコトノココロに無機物に宿るタマが反応して奇跡が起き、鏡の半片が空を飛んだ。そして、男の気持ちを汲んで、最も気になっていることについて真実を告げたのである。

日本の文化伝統では、すべての物体にタマが宿るが、よく神体にされていることから分かるように、鏡は特に強力なタマを宿すらしい。無機物に対するマコトノココロの作用について、この説話の末尾で『今昔物語集』の編者は次のよう次のように伝えている。

然レバ、實<sup>マコト</sup>ノ心ヲ至ス時ニハ心<sup>ナ</sup>无キ物ソラ如此クゾ有リケルトナム  
語り傳ヘタルトヤ。<sup>30)</sup>

夫は事情を知らないのであるから、鏡の半分は頼まれて空を飛んだわけではない。しかしながら、旅行前に鏡の半分を妻に渡した時に夫は強い願いを込めている。その時点で男はマコトノココロを発揮して、せっぱつまった気持ちを鏡に宿るタマに伝えていると言えよう。

## 兎が火に飛び込む話の日本版

マコトノココロが原則通り世のため人のために発動する場合には、引き起こされた奇跡のお陰で人々が救われるが（A）、必ずしも世のため人のために発動しないことがあり、そのような場合には、たまたまその時に当人が抱えている厄介な問題が解消するにすぎない（B）。巻16第27の説話は借金に苦しむ者の話である。

ある僧が勤務先の大安寺から金を借りていたが、ひどく貧しかったので返せなかった。寺の会計担当者からしこく返済を迫られたが、打つ手もないまま、ひたむきになって長谷寺で十一面観音に金をせびった。たまたま長谷寺に身分の高い人が来ていて、この僧に同情して金をやった。究極のレベルでマコトノココロを発揮したので、観音が助けてくれたのである。<sup>31)</sup>

厳しい取り立てに追い詰められた僧は、こうして目的を達して借金苦から逃れることに成功する。この際に祈願した対象は、目に見えないジフハウサンゼノショブツニョライ（十方三世ノ諸佛如来）ではなく、長谷寺に置かれていたジフイチメンクワンオン（十一面観音）の像である。すなわち、11の顔が付いた特殊な形態の彫像であり、マコトノココロに反応したのは、彫像という物体に宿るタマであった。この僧は自分の厄介事で精一杯であり、「先づ他ヲ利益スル」どころではない。しかしながら、動機が何であろうと、ひたむきな心で立ち向かえば、ブツダや高水準のボーディサットヴァと違って、日本のタマヤカミなら動かされるのである。

### B<sup>3</sup>

#### 日本人の理想を表す語 “マコトノココロ”

日本で伝えられている「火に飛び込んだ兎の話」に登場する猿と狐と兎が心掛けていた理想の生活態度は、“自ラノ事ヲバ捨テテ他ノ事ヲ前トス”という言葉で集約されている。この三匹が備えているのは“マコトノコ

ココロ”と呼ばれ、この語が表す概念は日本人の道徳を根底から支える重要な要素である。それだけに特殊な発展も見られるが、基本的意味は「私心の混じらない純粋な心」である。

見たところ、三匹は立派な行き方をしている。人間さえなかなかできないことを獣が実行しているのであり、にわかには信じ難い。真底からそうしているのか。あるいは、何か思惑があって見掛けだけそうしているのか。これがタイシャクテンの突き止めたことであり、テストの有効性が保証されるように、面倒を見ても何の得にもならない状況、見返りが全く期待できない状況が設定され、タイシャクテンは貧しく身寄りのない老いぼれとして三匹の前に現れる。これは日本版にだけ見られることであり、他のバージョンではインドラの姿を描くに際してこのような配慮をしていない。マコトノココロの真偽を試す必要がないからである。

日本のカミには「[私心が混じらない]純粋な心」を好む習性がある。人間が窮地から逃れようと一途に思い詰めると、そのマコトノココロに感動したカミが超自然力を発揮して、奇跡を起こすのである。そして、この習性がブツにも移された。日本のヤクシ（薬師）は「願ふところをよく与へたまふ」存在であった。<sup>32)</sup> この点でブツはカミと変わるところがない。この世の人々を片っ端からブツダにするというバーイシャジャグル (bhaisajyaguru/薬師) の役割は継承されず、日本に帰化したヤクシはカミ以外の何物でもなかった。

「[私心が混じらない]純粋な心」は、「[私心が混じらない]」という面よりも「純粋な」という面の方に比重がかかることがある（「[他のことに対する関心が混じらない]純粋な心」/「ひたむきな心」）。ともあれ、マコトノココロを備えた理想の日本人は、一本気で打算がなく、一つのことを思い詰めて外のことに目もくれない。

日本に跋扈するカミ-ガミが何よりも好んだのは「ひたむきな心」であ

## 兎が火に飛び込む話の日本版

り、たとえ個人的なトラブルを解決しようとする場合であっても、一途な思いは大いに評価された。『今昔物語集』に数多く語られている話では、ひたむきで一途な人間のマコトノココロに敏感に反応して、カミは超自然現象を起こすのである。

私心が混じろうと混じるまいと、カミは常にマコトノココロを好み、これを顕現する人間の頼みなら何でも聞く。このようなカミの習性を知る日本文化圏の人々は、マコトノココロによって神を動かし、どんな奇跡でも起こさせることができる。

さて、テストの実行者として登場するタイシャクテンは、三匹の動物に自己紹介して“我、年老<sup>ツカ</sup>ヒ羸<sup>セ</sup>レテ爲<sup>ナ</sup>ム方无<sup>シ</sup>”と言い、“我、子无<sup>ナ</sup>ク家貧クシテ食物无<sup>ナ</sup>シ”<sup>33)</sup>と言っている。他人に尽くすことが理想の行き方であっても、相手が力のある者である場合は、見返りを期待している可能性を排除できない。ここで証明しなければならないのは、そういう邪心が混じらない純粹なココロである。

“マコトノココロ”という語は日本文化に独特の概念を表し、それが覆う意味領域は「私欲が混じらない純粹な気持ち」(A)から「追い詰められて苦境を脱しようとする者のひたむきな気持ち」(B)に及ぶ。どの場合にもカミ (a) またはタマ (b) に対して強く作用するが、その結果として引き起こされる超自然現象は、私欲が混じらない場合は人々に救済をもたらすことになるが (A)、自分が追い詰められてひたむきになって願い事をする場合は、当人の苦境を解消するに留まる (B)。

## C<sup>1</sup>

### 究極目標が変わったために崩れたバランス

仏教文献の記述によると、遙か未来に実現すべき「報い」(phala/果)として、難易度ランキングの上位グループに属するのは、神々の王インドラ

になることであり、世界を支配する霸王になることや世界一の金持ちになることである。このような「報い」を受けるのは困難の極みであり、限りなく「轉生」して常軌を逸した「善い行い」を繰り返さなければならない。しがしながら、ブツダになることの困難に比べれば、この種の「報い」は実現が遥かに容易であり、しかもインドラになればどんな望みも叶うし、世界の霸王や世界一の金持ちになれば、地上で得られるものなら何でも得られる。

したがって、「善い行い」に熱中している者を見れば、神々の王になろうとしていると思ったり、世界の霸王や世界一の金持ちになろうとしていると思うのが当然である。ブツダになるというのは最も困難な目標であるのに、この世で得られるものは何もない。このような目標を目指しているなどとは、容易に信じられない。

さて、仏教では永遠の存在が否定されているので、神といえども命がいつまでもあるわけではない。今のインドラはいつかは死に、次のインドラに交替する。天上で神々を支配する身であっても、インドラはいつまでも安閑としておれるわけではない。誰かが異常なまでに「善い行い」に熱中しているのを知ると、インドラは自分の地位をうかがっていると思ひ込み、そうでないことが納得できるまで執拗に調査を続ける。このような場合に、ブツダを目指していることが確認できれば、乗っ取りの心配が消え、インドラは安心して引き下がる。

異常なまでの不安に駆られて天上の最高実力者がやって来た時、その疑惑を解くのは容易でない。ブツダを目指していることを納得させるには、「ボーディサットヴァとしての行為」を究極のレベルで実践するくらいしかない。「ブツダになる決心」を証明するための対価としては、自分の身体を食用に提供するくらいでないとバランスがとれないのである。

「ブツダが兎であった時の話」で、インドラの訪問を受けた兎の立場は

## 兎が火に飛び込む話の日本版

このようなものであった。したがって、火の中に飛び込んで死ぬという異常としか思えない行為も、ブツダになるという最高の「報い」を得る困難さを思えば、十分にバランスがとれているのであり、この説話で見せ所となる場面は、それなりの必然性がある設定されている。

ところが、『今昔物語集』の巻5第13では、テストの対象である「ブツダになる決心」がマコトノココロに入れ替わって、このバランスが一挙に崩れた。マコトノココロのように日常の生活で発現されるものが対象であるなら、天上世界の支配者がわざわざ出向いてテストをするほどのことはない。超天文学的な規模の企てにしかインドラは関心がない。何しろブツダになるには少なくとも $1296 \times 10^{57}$ 年の時間が必要であるし、<sup>34)</sup> 本人の杞憂にかかわらずインドラの寿命はほぼ無限大である。

この超壮大な構想の前では、いくら“難有アルガタキ心也”と言ったところで、マコトノココロを究極の水準まで高めるなど軽いものである。確かに人間の本性を思えば無欲になって人に親切にすることは容易でないかも知れない。しかしながら、心優しく他人に接しようとするのもありふれた人間の望みであり、少し心掛けさえ良ければ、マコトノココロの実現は日常生活の中で容易にやれることである。そして、どんな凡庸な人間も、ある程度は実践していることである。

マコトノココロの真偽を試すことは、確かに容易ではない。他人を思いやって優しい振るまいをしても、うわべを取り繕っているだけかも知れないのである。しかしながら、容易でないといったところで、日常的なレベルで容易でないに過ぎない。ブツダになるつもりがあるのかどうかを試すことに比べれば、マコトノココロのあるなしを探るのははなはだ簡単なことである。

ブツダになろうとすることは、非日常的な企てであり、「轉生」が自然現象と見なされる特異な文化圏で設定されている究極目標である。ブツタ

を目指す決心のほどを他人に納得させることは尋常な手段ではできず、よほど常軌を逸した行為を実践することによって証明するしかない。一方、マコトノココロの場合は、困難なことが話題になっているとはいっても、すべてが日常生活の枠内の問題に過ぎない。

ブッダになる決意が疑わしい場合にこそ、インドラのテストは効果的であるが、マコトノココロを試すにはあまりにも大袈裟すぎる。したがって、兎が火の中に飛び込む場面へ話を導く伏線としては均衡がとれず、その結果としてストーリー構成に適切さを欠くことになった。

## C<sup>2</sup>

### 死にたくなるほどの苛め

このバランスの崩れをいくらか補足するのが、他のヴァージョンにはない苛めの場面であった。役立たずの兎を狐と猿があざ笑い、急き立てて追い詰めるのである。この場面は「ブッダになろうとする決心」の欠如によるバランス崩壊を食い止めるのにいくらか貢献している。異常な行為に兎を追い込んだ苦境が設定されたことになり、火に飛び込む場面の伏線として、苛めの場面は不十分ながらも機能している。

狐と猿の苛めはこの後も続く。火の中に飛び込むことに腹を決めた兎は、火の用意をするように頼んで出掛ける。取って来た獲物を料理するためかと思って火の用意をしていた狐と猿は、また兎が手ぶらで帰って来たのを見て、身勝手だとなじり、さんざん嫌みを言う。騙されたと思い込んだ狐と猿は、“お前が何も持たずに帰って来るのは予想していたことだ。自分が暖まろうとして騙して火を焚かせやがって、ああ憎い”と言って、一方的に兎を責め立てる。マコトノココロのテストに合格したくせに、哀れな兎の気持ちを察しようともせず、憎悪を剥き出しにしているのである。

汝モチ何物ヲカ持キタルテ来オモヒラム。此レ、思ソラコトツル事也。虚言ヲ以テ人々ヲ謀タバカラ

## 兎が火に飛び込む話の日本版

テ木ヲ拾ハセ火ヲ<sup>タカ</sup>焼カセテ、汝<sup>アタタ</sup>ヲ火を温<sup>アナニ</sup>マムトテ、<sup>ア</sup>殞ク。<sup>35)</sup>

「ブッダになる決心」がマコトノココロに入れ替わることによって生じたバランスの崩壊は、苛めの場面が設定されたためにいくらか食い止められた。しかしながら、その結果として今度は、「同一作品における性格の一貫性」が成り立たなくなった。登場者の性格が途中で唐突に激変して、マコトノココロの具現者としてふさわしくない言動をとる。

この説話の冒頭で紹介されているように、同僚である兎と同じく、この狐と猿はマコトノココロが備わっていて、思いやりのある優しい性格である。しかも、タイシャクテンのテストに合格して、そのマコトノココロは保証付となった。それが突然この場面で性格ががらりと一変し、意地悪な苛め役に急変するのである。こうなると、“我ヨリ少シ進ミタルヲバ兄ノ如クニシ”というマコトノココロ発現者の生活態度は消えうせる。

兎自身もまた性格が変わる。苛めに遭った兎はすっかりいじけてしまい、野や山へ出掛けることさえ怖がるようになった。こうしてマコトノココロの具現者として華々しく登場した獣たちの指導者は、今ではすっかり腑抜けになり、死んで楽になろうとして火の中に飛び込むのである。また、狐と猿が同僚を憎むようになったことについては、兎の方にも大いに原因がある。最後に森へ行く前に、“旨い物を持って帰る”<sup>36)</sup>と言って、二匹の同僚に真実を告げていないからである。兎と外の獣の間にはもはや信頼関係はないのである。『大唐西域記』の話で一貫しているのは「異種、相悦ぶ」状況であり、<sup>37)</sup>『今昔物語集』の話でも最初はこれが保持されていたが、マコトノココロが機能しなくなるや、たちまち完全に瓦解した。こうして、この作品は統一性を欠くものとなったのである。

マコトノココロを試すはずであったタイシャクテンは、旨いものを腹いっぱい食うと、すっかり満足してしまう。自分を満足させてくれた狐と猿を激賞し、外のことに気を配るゆとりはない。狐と猿が栽培植物や供え

物を掠め取って人間に損害を与えても気にしないし、この獣たちといっしょになって、人間用食物の調達を強いて草食動物を困らせている。旨い物をたらふく食ったタイシャクテンは、狐と猿にボサツの称号を認定して、事情を考慮することなく兎を責めるのである。マコトノココロの真偽をテストをするはずのタイシャクテンは、食欲の満足にしか興味がなくなって、見かけ通りの凡庸な老人になってしまった。ここにいるのは食い意地の張った薄汚い年寄りの姿でしかない。

この平安時代の説話集に採られている話では、息子のいない老人を有能な猿と狐が養い始めるが、このことが日常化すると、無能な兎は苛めに合い、猿と狐は老人といっしょになって嘲けり、せせら笑ってプレッシャーをかける。苦境に立った兎は、必死の努力をするのであるが、成果は全く上がらない。追い詰められた兎は、自分の肉を食肉として提供するしかない。インド語や中国語で伝わる「ブツダが兎であった時の話」には、苛めの場面が全くない。ただ『大唐西域記』では、インドラが化けた老人に「猿と狐はよくやるが、兎は何も持たずに帰ってくる」と言わせている。<sup>38)</sup> この場合でも、猿と狐が老人の尻馬に乗って兎を苛めることはない。老人の言葉は兎にとって辛かろうが、集団苛めはないのである。それに、老人には苛めるつもりがない。老人に化けたインドラの意図はテストであり、兎を責める言葉もその一環である。この言葉は兎を萎縮させることがなく、むしろ驚くべき行為を決心するきっかけとなっている（兎、譏議を聞きて、狐と猿に謂ひて曰く「多く樵蘇を聚めよ。方に作す所あり」と）。<sup>39)</sup>

ジャータカやアヴァダーナでは、自分の身体を食用肉として提供するという異常な行為は、ブツダになろうと確かに決心していることを証明するためであった。ところが、『今昔物語集』の兎はブツダになるつもりがないのであるから、別の動機が必要であった。そのために設定されたのが日常的な苛めの場面である。

C<sup>3</sup>

死にたくなるほどの恐怖

『今昔物語集』に登場する日本の兎は、ブツダになる決意を証明する必要がないのに、火の中に飛び込んだ。この不均衡を補正することになるのは、火に飛び込む場面の直前に置かれる苛めの場面である。こうして話の展開が変わり、苛められて思い詰めたあげくに、とんでもなく異常な行為をとることになる。

仏教のボーディサットヴァなら、苛めに遭ったくらいでたじろぐはずもないが、この兎はそうではなかった。頑張り続ける気力はもはやすっかり失せている。野や山へ行くのが怖くてしかたなく、食べ物を探しに行くのを嫌がって、何とか口実を設けて逃げようとしている。

野山怖<sup>オソロ</sup>シク破<sup>ワリナ</sup>无<sup>コ</sup>シ。人<sup>コロサ</sup>ニ被<sup>クラ</sup>皴<sup>ハルベ</sup>レ、獸<sup>イタズラ</sup>ニ可<sup>アラ</sup>被<sup>アラ</sup>噉<sup>アラ</sup>シ。徒<sup>アラ</sup>ニ、心<sup>アラ</sup>ニ非<sup>アラ</sup>ズ、  
身<sup>ハカリナ</sup>ヲ失<sup>ハカリナ</sup>フ事<sup>ハカリナ</sup>无量<sup>ハカリナ</sup>シ。<sup>40)</sup>

こうして、周囲から課せられる苛めに加えて、恐怖が兎を追い詰めることになる。ここで火の中に飛び込めば、猿と狐を出し抜いて今の苦境から脱せられるし、野や山へ行く恐怖からも逃れられる。だらしのない兎が楽になろうとして思いついた究極の名案がこれであった。

ほかの二匹は大きな成果を挙げたのに、何もできない気の毒な兎は周囲から苛められて追い詰められ、さらに頑張り続けるにしても、野山に行くのが怖くてしかたがない。思い悩んだあげく、とんでもない決意を固める。

我<sup>オキナ</sup>レ今、此<sup>オキナ</sup>ノ身<sup>クラハレ</sup>ヲ捨<sup>シヤウ</sup>テ、此<sup>オキナ</sup>ノ翁<sup>クラハレ</sup>ニ被<sup>シヤウ</sup>食<sup>シヤウ</sup>テ永<sup>シヤウ</sup>ク生<sup>シヤウ</sup>ヲ離<sup>シヤウ</sup>ム。<sup>41)</sup>

パーリ『ジャータカ』に登場する兎の「心」は、次々といろいろな身体を經由して、ついにシャーキャ部族国家の元皇太子の身体に移動し、最後には消滅して二度とどの身体にも宿ることはなかった。こうして、「轉生」が断たれてブツダになったのである。

ところが、『今昔物語集』に出てくるのは、苦しさに耐え兼ねて逃避を図る不甲斐ない兎であり、死んで楽になろうと思っている。仏教ではここで焼き肉として食われたところで、「永く生ヲ離レ」て究極の目標を達成するわけではなく、まだまだ「轉生」を繰り返すのであるが、ここに描かれているのは日本文化圏の兎であり、「轉生」の恐ろしさなど知らず、したがってブッダにあるつもりはない。

この兎はボーディサットヴァなどではなく、最初から「ブッダになろうとする決心」などしていないのである。そして、ここに登場する日本の兎は、自らの身体を人に食わせることによって「[惜しみなく]物を与えること」をただならぬ形で行っているのではない。ブッダになるという最も困難な「報い」を得るための条件作りをしようとしているのではないのである。

『今昔物語集』に見られる“永く生ヲ離レ”という表現は、もし仏教の文脈で使われるなら、「生きている身体と結び付くことが永久になく」という意味を表すであろう。もはや「轉生」することなく、ブッダに成るということになろう。しかしながら、この場面ではインドの兎もまだブッダにならない。まして日本の兎はブッダになる準備すらするつもりがない。そうすると、日本人の手で翻案された説話では、死んで楽になろうとする兎の言葉として、「これでさっぱりこの世におさらばして」の意味で使われている。<sup>42)</sup>

この平安時代の説話集に採られている話で、息子のいない老人を有能な猿と狐が養い始めるが、このことが日常化すると、無能な兎は苛めに合う。猿と狐は老人といっしょになって嘲けり、せせら笑ってプレッシャーをかける。苦境に立った兎は、必死の努力をするのであるが、成果は全く上がらない。それに、人間の食う物を探そうとして野山に入れば、いずれは人間か肉食動物に殺されるのは避けられまい。追い詰められた兎は、自分の

肉を食肉として提供するしかない。

D<sup>1</sup>

前世を知るブッダが登場しない話

仏教説話で示されるのは実例を示して「行いと報いの対応法則」を裏付ける実例である。前世の出来事と今生の出来事が語られ、それぞれに登場する人物の対応が指摘される（“あの時のAは今のBだ”）。その際に解説者の役割をするのは、あらゆる人の前世に通じているシャーキャ-ブッダである。

ジャータカやアヴァダーナ (avadāna)<sup>43)</sup> では、地の文の中に“ブッダは以前の生涯で起こったことを語る”という言葉があって、<sup>44)</sup> 『大唐西域記』には“この場所がかつてブッダが自分の身体を焼いた”という前置きがある。これから語られるのは以前の生涯で起こった出来事であると冒頭で明記しているのである。

ところが、『今昔物語集』の第5巻13話にはこのような地の文も前置きもない。したがって、当然ながら「人物の比定」もない。ここで描かれている出来事は、以前の生涯で起こったこととして扱われていないのである。そうすると、この話は「ブッダが兎であった時の話」ではない。「兎が自分の身体を食肉として与える話」は、確かに日本に伝わったものの、もはやジャータカではないのである。

『今昔物語集』に伝えられるジャータカ起源の説話には、「人物の比定」が見られることも確かにある。<sup>45)</sup> 例えば、第5巻第18話<sup>46)</sup> には“彼ノ七色ノ鹿ハ今ノ釋迦佛ニ在マス”と言われて、鹿がシャーキャ-ブッダに比定され、鳥はアーナンダに、皇后はスンダリー (sundari/孫陀利) に、そして裏切り男はデーヴァダッタ (devadatta/提婆達多) に比定されている。<sup>47)</sup> しかしながら、このような場合にも冒頭には語り手としてのブッダが登場

しない。<sup>48)</sup> それに、鹿とブツダとの対応が説明されているにしても、“マシマス”と敬語表現が用いられている以上、語り手は「以前の生涯」に通じたブツダではなく、説話伝承者にすぎない。

いずれにしても、『今昔物語集』では「人物の比定」が欠けている場合が遥かに多い。何しろ「轉生」が信じられていないし、ブツダを目指して頑張る者がいないのであるから、「人物の比定」が欠けている方が日本説話としては自然であり、第5巻第18話のような例は日本風翻案が入念になされなかった場合と見なされよう。

『リグ-ヴェエダ』(ṛg-veda)に溯る古いインドの伝承によると、神(deva)と神に準じる超人は「子宮から生まれぬ者」(ayonija)である。仏教の伝承によると、子宮から生まれる普通の人間の場合は、「出産時の苦痛」(jamna-duhkha)のためにそれまでの記憶が失われるが、「子宮から生まれぬ者」はこの苦痛がないので記憶を失わずにすむ。シャーキャブツダもまた「子宮から生まれぬ者」であって、<sup>49)</sup>「以前の生活を思い出す能力」(pūrvanivāsānumṛti-jñāna/宿命通)を備えている。<sup>50)</sup>

この能力は仏教の体系で構想された「超能力」(abhijñā/神通)<sup>51)</sup>の一つであり、ブツダまたはブツダに近い水準の人だけに備わっているとされる。仏教文献で以前の生涯について語るのは、以前の生涯を自ら認知できる者に限られる。ジャータカやアヴァダーナに見られる「人物の対応説明」は、あらゆる人の前世に通じているブツダ自身が自らの認知を語ったものであり、又聞き記録ではない。ところが、『今昔物語集』の場合はブツダからの又聞きでさえない。超能力とは無関係に「彼ノ鹿」について語られているのである。

説話集『日本靈異記』には変身物語がいくつか収められていて、人間が記憶を保持したまま人間以外の動物に変身する。人間であった時のことを獣が覚えているのである。<sup>52)</sup> 獣でさえできることであるから、人間なら誰

でもできることになろう。

インドに生まれ育った人々にとって、「轉生」は信じられないほどの不思議なことではなく、当然の成り行きであり、ありふれた自然現象の一つに過ぎない。したがって、人々の経験と矛盾することではありえない。「以前の生涯」を記憶している者が人々の周囲にいず、並の人間にかかわりがなくことである以上、これは超能力に帰すよりない。前世を知る異常人間ブツダが登場して報告しない限り、人々には前世のことを知るすべがないのである。

ところが、「無限の過去から未来永劫に持続する心」を想像することさえできない日本人にとって、「轉生」そのものが誰にでも起こる自然現象ではない。『日本靈異記』には僧が毒蛇に生まれ変わる話や家の主が牛に生まれ変わる話が採録されているが、そういうことは当然の成り行きではなく、めったに起こることではなかった。雷を逮捕することや牝狐を妻にすることなどと同じように、クシキコト（奇事）であった。<sup>53)</sup> このように、「轉生」そのものが異常な現象である以上、どんな能力を備えた人がそれを覚えているかを気にすることもなかった。日本の物語にはブツダが登場して前世であったことを報告する必要がなかったのである。

『今昔物語集』に採られた話で人物の対応説明をする語句が用いられているといっても、ジャータカの意図に添ったものではなく、仏教文献を読んで知った表現形式を機械的に模倣しているにすぎないのである。その結果、説話の他の部分との間に齟齬が生じ、この種の語句は全体から浮き上がることになった。例えば、“彼ノ九色ノ鹿”に対応させられているのは、“今ノ釋迦佛”である。仏教文献にあって、“今ノA”という常套句はブツダ自身の発言の中に見られ、“今”というのはブツダが生存していた時代のことである。

ところが、『今昔物語集』の説話にはブツダが登場する冒頭部分がない

ので、この“イマ”はブッダ生存していた時代ではない。それに、“今ハ昔”と言うように、『今昔物語集』で“イマ”という語が指すのは、物語が語られている時点であって、ブッダが生存していた時代ではない。

## D<sup>2</sup>

### 玄奘の記述に一致する点

さて、インドと中国に伝わる「兎が火に飛び込む話」の中で、日本ヴァージョンに共通する要素がいくらか認められるのは、玄奘（602-664）<sup>54)</sup>の『大唐西域記』に伝えられている話である。<sup>55)</sup>『今昔物語集』の話に登場する獣は4匹ではなく3匹であり、<sup>56)</sup>この点で一致する中国文献は『大唐西域記』だけである。また、仏教で伝えられている説話には、前世の人物と現在の人物との対応を示す箇所が必ずあるが、<sup>57)</sup>これが『今昔物語集』の話に欠けている。この点でも一致する中国文献は『大唐西域記』だけである。『今昔物語集』の伝える「兎が火に飛び込む話」の成立に玄奘の記述が深く係わっていたと示唆される。

インドを旅していた玄奘は、バラナーナシー国（vārāṇasī/婆羅痾斯）の近くで“烈士池”という池を見た。この池の西にストゥーパ（stūpa）があった。ブッダが前世で行った驚くべき偉業を記念して、このストゥーパが建てられたという。ここで「ブッダが兎であった時の話」が紹介される。

インド文献『ジャータカ』に登場する動物は兎（sasa）と猿（makhaṭa）と川獺（udda）とジャッカル（sigala）であり、ジャッカルが狐になっているものの、他の中国語ヴァージョンでもこれを継承していて4匹である。これと違って、『大唐西域記』では兎と狐と猿の3匹である。

『ジャータカ』に登場する動物は4匹であり、『大唐西域記』のヴァージョンにも登場する猿の外に、ジャッカルと川獺がいる。ジャッカルは狐と同じイヌ科の動物であるが、川獺あるいはそれに似た動物は、『大唐西域

## 兎が火に飛び込む話の日本版

記』のヴァージョンに登場することがない。

パーリ『ジャータカ』では川獺が魚の調達を担当している。『大唐西域記』では川獺がいないので、狐がこの役目を引き受けている。パーリ『ジャータカ』ではジャッカルが肉の調達を担当しているが、『大唐西域記』ではこの役目を引き受ける獣がいない。このように、食料調達者が1匹少なくなり、獣たちが提供すべき食料の種類が一つ減ってはいるが、ストーリー展開に重大な変化が起こったわけではない。

次に、『大唐西域記』に伝えられている話には、前世の人物とシャーキャブツダの時代の人物が同定されていない。これは『大唐西域記』が旅行記であるという制約の結果である。玄奘はインドを旅行していた途中で「烈士池」に立ち寄った。この池が注目に値するのは近くに「三獸率堵波」があるからである。ここで玄奘の意図はこのストウパの由来を語ることであり、古くからの形式に従ってジャータカを伝えることではない。

もっとも、この記事の冒頭で玄奘は“是れ、如來が菩薩行を修めし時、身を焼ける處なり”<sup>38)</sup> と言っている。これから語られる兎が実はブツダの前世の姿であることを明らかにしているのである。『大唐西域記』が説話集ではなく旅行記であり、ここでは名所旧跡のいわれを紹介するのが目的である以上、末尾で人物の比定をしてジャータカの形式を整えているわけではないが、以前の生涯でブツダが行った驚くべき行為を伝えるというジャータカの意図は保たれているのである。

ところが『今昔物語集』の採られた話では、テンヂク（天竺）から伝わった話という触れ込みにもかかわらず、ジャータカの形式が無視されているだけでなく、この兎がシャーキャブツダの前世の姿であるということさえ、話の中で一切語られていない。

『大唐西域記』でも『今昔物語集』でも、獣の数が4匹ではなく3匹であり、人物の対応が説明されていない。この2点は他のどのヴァージョン

にも見られないことであり、日本ヴァージョン「兎が火に飛び込む話」の成立に玄奘の文章が関与したことは否定できまい。しかしながら、内容の上では両者の間に大きな断絶がある。『大唐西域記』の話はジャータカの伝承を忠実に伝えたものであり、『今昔物語集』の話は仏教の伝承とは関係のないマコトノココロ説話である。

## E

### 月面に移された兎の身体

パーリ『ジャータカ』に伝えられる話の末尾には、“インドラは月の面に兎の姿を描いた”<sup>59)</sup>という言葉がある（“姿”: *lakkhaṇa*, “描く”: *ālikh-*）。インドの古典文学では、月は“兎のマークが付いたもの” (*śaśāṅka*) と呼ばれ、月の斑点は兎の形をしているという伝承は、2500年以上前のヴェーダ文献に溯り、『ジャーイミニヤーブラーフマナ』 (*jaiminiyabrāhmaṇa*) に伝えられるのが<sup>60)</sup> 最古の言及であるらしい。<sup>61)</sup>

『大唐西域記』の作者も、“[兎の]燼を除きて骸を取めた”という記述の後で、帝釈天は狐と猿に向かって“其の跡が<sup>ほろ</sup>混ばざるやう、之を月輪に寄りて後世に傳へむや”<sup>62)</sup> と言う。“月の面に兎の姿を描いた”というジャータカの言葉を継承しているのである。<sup>63)</sup> この話がジャータカであることを玄奘は明確に意識していた。

『今昔物語集』に伝えられる「兎が火に飛び込む話」でも、“此ノ兎ノ火ニ入タル形ヲ月ノ中ニ移シテ、普ク一切ノ衆生ニ見シメムガ爲ニ二月ノ中ニ籠メ給ヒツ”<sup>64)</sup> とある。タイシャクテンが月面に操作した結果は、兎が火の中に飛び込んだ瞬間をとらえた画像であった。空に向かって動く煙りも、静止画像として固定され、月面に見える“雲ノ様ナルモノ”となった。タイシャクテンが月の表面に移したのは、兎が火の中にいる様子（“形”）であり、この点で『大唐西域記』の記述をよく伝えている。

## 兎が火に飛び込む話の日本版

ところが、日本では“兎が月の中に生まれ変わる話は原典（『大唐西域記』）に見られるだけである”などという解説が受け入れられていて<sup>65</sup>，“「兎が月の中に生まれ変わる話」は、他のどの中国語ヴァージョンには見られず、『大唐西域記』だけに見られる”という通説が確立されているらしい。しかしながら、「兎が月の中に生まれ変わる話」など『大唐西域記』にも『今昔物語集』にも、そのような記述が見られないし、言うまでもなく『ジャータカ』316にもない。

ところで、中世の日本文献に散見する記述を見ると、タイシャクテンが月に移したものは身体であると明記されている。『塵添囊鈔』は雑多な項目から成る大冊の雑書であるが、その14巻には「月ノ兎ノ事」という記事が見られ、“骸骨ヲ將テ月ノ中ニ置ク。其ノ焼ヲ取りテ月ノ中ニ置ク”<sup>66</sup>とある“骸骨”と“焦”（焼け残り）と表現の違いはあっても、月に移されたのは身体の残存物である。

『塵添囊鈔』の著者は“骸骨”を月に移したと言う文の出典を『未曾有經』とし、“焦”を月に移したと言う文の出典を『法苑珠林』とするが、このような記述はどちらの文献にも見られない。なお、この『塵添囊鈔』は1532年に成立した文献であるが、問題の記事は1446年に成立した『堪囊鈔』から「月ノ中ニ兎有リ」（巻9、26）をそのまま移したものである。

「月の兎」に関する伝承は日本独自の展開を遂げ、良寛（1758-1831）は月の兎を取り上げて二つの歌を作っている。興味深いことに、良寛の歌で兎は“ヤサシ”と言われ、その行動によって発現されたのは“マコト”（實）と呼ばれている。

兎は殊にやさしとて骸を抱えてひさかたの月の宮にぞ葬りける。<sup>67</sup>

久方の天の帝の聴きまして其がまこと實を知らむとて翁になりてそが許に  
よろほひ行きてまうすらく。<sup>68</sup>

仏教で構想された「轉生」に無縁な日本では、月面に見えるのが映像で

はなく遺骸であると考えられるようになり、『塵添囊鈔』に“骸骨”や“焦”の語が用いられたのである。そして、これは日本だけに起こったことであり、兎の遺骨への言及は資料として使われた『未曾有經』にも『法苑珠林』にも痕跡が見い出せない。

『鶯林拾葉鈔』は1512年に成立した日本文献であり、『法華經』を種本にしてとめどなく雑事を述べたものである。日本で最も重んじられた仏教經典を巡って語ると言っても、脱線の仕方が並ではなく、奇想天外な与太話が次から次へと脈絡なく出て来る。

さて、『法華經』の冒頭にはブツダの周りに大勢の弟子が集まる場面があるが、出席者の一人であるインドラ（帝釋天）が多くの家来を従えていて、その一人の名前が“チャンドラデーヴァプトラ”（candradevaputra）であり、中国語訳では“名月天子”と言われる。<sup>69）</sup>ここで“帝釋天”と“名月天子”がいっしょにいる場面を読んで、『鶯林拾葉鈔』の編者の思いは飛躍する。タイシャクテンが兎の手を取ってテン（天）に昇り、ミヤウゲツテンシ（名月天子）に預けたというのである。<sup>70）</sup>この兎は現世で焼け死んだのであるから、タイシャクテンがテンへ連れて言ったのは、ライガウ-ボサツ（來迎菩薩）がゴクラク（極樂）に連れて行く際の来世用の身体に準じるものであろう。

『今昔物語集』のお陰で、月の兎は日本で広く知られるようになった。そして、仏教で構想された「轉生」に馴染めなかった日本人の想像の中で、月へ移されたのが身体とかかわりのあるものということになった。これは仏教の「轉生」ではなく、日本のテンシャウである。仏教で「轉生」するのは「心」であり、これに身体は関与しない。

ところが、日本では生前の身体の複製物がテンシャウに関与して、魂と共にアノ-ヨ（彼ノ世）へ行くようである。兎が月の中に生まれ変わるといふ奇想天外な解釈は、日本で開発されたテンショウの伝統を受け継ぐも

のであるらしい。

F

仏教のボーディサットヴァとは無縁な日本のボサツ

『今昔物語集』に採録されて以来、「火の中に飛び込んだ兎の話」は日本の人々によく親しまれ、兎が月にいるという言い伝えが日本文化圏で広く知られるようになった。これは「轉生」することがない日本の兎である。また、老人に化けてやって来たのは日本のタイシャクテンである。もっぱらマコトノココロに關心を寄せ、栗や柿、鮑や鰹など好むところを見ても、<sup>71)</sup> これはインドラではありえない。そして、狐と猿も含めて、この話に登場するのは、すべて日本生まれの日本育ちである。

これは仏教説話ではなく、中国語で伝えられる仏教説話を下敷きにして作られた日本説話である。“ゼンセ”（前世）とか“ザイシャウ”（罪障）とかいう語を仏教文献から借りているとはいえ、仏教伝承にこだわらずに場違いな所で用いている。マコトノココロの發揮に熱中するボーディサットヴァなどいるはずもなく、日本語の“ボサツ”（菩薩）は仏教の“ボーディサットヴァ”（ブツダを目指す人）と無縁である。

仏教のヴァージョンに登場する獣たちは、ボーディサットヴァに要請される条件を満たそうと気を使っている。<sup>72)</sup> そして、中でも兎は最初から特別な存在である。<sup>73)</sup> ところが一方、仏教世界のボーディサットヴァと違って、日本の獣たちは日々の生活の中で「心掛け」を守るつもりなどないし、定められた日にウポーサタの行事に参加しようとする気配もない。ブツダを目指すつもりが全くないのである。

仏教ではブツダになろうと決心した者なら誰でもボーディサットヴァであるが、日本ではよほど尊敬された人でないとボサツとは呼ばれなかった。よく知られている例は行基（668-749）である。行基は若い頃から諸国を

「周遊」し、橋や堤防を作って社会に大いに裨益した。<sup>74)</sup>

やがて、この称号は特殊なカミにも使われるようになった。鹿島灘に上陸して“人々を救うために再びやって来た”と自己紹介したオホナムチースクナヒコナ（大奈母知-少比古奈）は、<sup>75)</sup>“ヤクシボサツ-ミヤウジン”（薬師菩薩名神）と呼ばれるようになった。<sup>76)</sup> 日本古来の礼拝対象が“ボサツ”と呼ばれる例は少なく、医療活動で社会に裨益したヤクシならではのことである。

日本で生まれ育った人間の行基も、日本に帰化してカミとなったヤクシも、世のため人のために尽くすことでよく知られ、“自ラノ事ヲバ捨テ、他ノ事ヲ前トス”と言われるべき存在である。マコトノ-ココロを最高度に備えているのである。

『今昔物語集』に伝えられる「兎が火に飛び込む話」で、身寄りのない哀れな貧乏老人に化けた日本のタイシャクテンは、三匹の獣に奉仕させてマコトノ-ココロをテストしようとしたが、見事に合格した狐と猿を絶賛して次のように言う。

此ノ二ノ獣ハ實ニ深キ心有リケリ。此レ既ニ菩薩ナリケリ。<sup>77)</sup>

仏教世界では、ブッダになろうと頑張るだけで“ボーディサットヴァ”と呼ばれる。ところがここでは、究極の奉仕に気をよくしてひどく寛大になった超越者の絶賛の言葉の中で、最高の評価を示すために“ボサツ”という語が使われている。日本語の語彙体系で、“ボサツ”は“ブツ”に準ずる超高位称号であり、マコトノ-ココロが究極に近いレベルまで深まった者に限定して用いられるのである。<sup>78)</sup>

#### 略号

『今昔』: 『今昔物語集』

『古大』: 『日本古典文学大系』, 1952-1967

『國大』: 『國史大系』, 1942

『大正』: 『大正新脩大藏經』, 1924-1932

注

- 1) 『今昔』 5.13 「三獸行菩薩道 兎燒身語」, 『古大』 22, 1959, pp. 365-367.
- 2) *ibid.*, p. 365.
- 3) *loc. cit.*
- 4) *ibid.*, pp. 365-366.
- 5) 『ジャータカ』が作られた時代には、前世のブツダだけが「究極の知恵を目指す存在」として考えられていた。ところが、後代になってマハーヤーナ (*mahāyāna*/大乘) が起こると、その気になりさえすれば今生きているすべての人が「究極の知恵を目指す存在」でありえることになった。

ブツダになるプロセスは限りなく長いが、その第一歩として一人一人がその気にならなければならない。「[究極の真理に]目覚めようとする心」(*bodhi-citta*/菩提心)は自然に起こるものではなく、個人の決意の結果である。個人が自らの決意によって「目覚めようとする心」を発生させる。

このことを文で表現して、“*bodhicittam utpādayati*” (目覚めようとする心を生じさせる/目覚めようと決心する)と言う。これは中国語で“發[菩提心]”と訳された。

マハーヤーナの支持者たちにとって、究極の真理を理解して苦しみの世界から解放されるには、知恵を磨くだけでは不十分であり、世の人々の解放にも力を貸すことが不可欠な前提条件となる。究極の真理を理解しようと決心した人は、世の人々も苦しみから解放しようと必ず決心している。したがって、“*bodhicittam utpādayati*” (目覚めようとする心を生じさせる)というサンスクリット文には、「ほかの人々も苦しみから解放しよう」という決意が常に含蓄されている。

単独語の“*citta*” (心) は、“*utpādayati*” (生じさせる) という動詞と共に用いられる場合、単なる「心」を指すのではなく、「目覚めようとする心」を指す。すなわち、動詞“*utpādayati*”の目的語である限り、名詞“*citta*”は名詞合成“*bodhi-citta*”と同じ意味を表す。これは中国語訳でも同じであり、動詞“發”(ぱっと外へ出す/生じさせる)の目的語である限り、“心”は“菩提心”と同義語である。

“發-心”という語結合は，“cittam utpādayati”（心を生じさせる）または名詞合成“cittotpāda”（心が生じること）の訳として中国語仏典で用いられ、特定の仏教的概念（「真理に目覚めようと決心し、この目的を達するために他の人々も真理に目覚めさせようと決心すること」）を表す。

6) 『今昔』 5.13, p. 366.

7) 中国語表現“發-心”は日本語で“ココロヲ-オコス”と訳されたが、日本語文献で無制限に用いられるようになったわけではない。中国語の“發”が「ぱっと外へ出す/生じさせる」を意味するのと違って、日本語の動詞“オコス”は「休んでいるものを再び活動させる」という意味であり、“ココロヲ-オコス”というふうには、“ココロ”を直接目的にして「発生させる」の意味で用いるのはいささか不自然であったのか、「仏教的」文脈にしか用いられていないのである。そうすると、“ココロヲ-オコス”という表現を使っている時、日本人は仏教について語っているつもりなのである。

仮名まじりで表記された古い散文を調べてみると、“ココロヲ-オコス”という表現は、9世紀後半に成立した『竹取物語』と935年に成立した『土佐日記』には全く見当たらず、10世紀末に成立したらしい『うつほ物語』になって、やっと1回だけ用いられている（『古大』 11, p. 48: 佛、菩薩をおどろかし、懈怠邪見の輩に、忍辱の心を起さしむるゆえに）。

音読された“ダウシン”（道心）を目的語として、「出家しようとする」という意味で“ダウシンヲ-オコス”と言うこともあるが、単独語“ココロ”を目的語として“ココロヲ-オコス”と言う場合は、「せっぱつまってブツにすぎるしか活路のない状況」を前提として用いられる。

8) 11世紀初頭に成立した『枕草子』では、動詞“オコス”の目的語として“道心”が用いられている例が一つあり（「信仰心を生じさせる」），“心”が用いられている例も一つあるが、この“ココロ”は“道心”の同義語であり、自動詞“オコル”が用いられている（「信仰心が生じる」）。

『枕草子』、『古大』 19, p. 92: ぬかづき蟲、またあはれなり。さる心地に道心おこしてつきありくらんよ。

ibid., p. 173: 犬防のうち（本尊のある内陣）見入れたる心地ぞ、いみじうたふとく、などで、この月頃まうでで過しつらんと、まづ心もおこる。

## 兎が火に飛び込む話の日本版

同じく11世紀初頭に成立した『源氏物語』では、“心ヲオコス”と表記される表現が8個所で用いられていて、そのうち2回は目的語が“道-心”であり（「御法」、『古大』17, p. 174; 「手習」, 18, p. 409）, 1回は目的語が“道心”の省略表現「心」である（「手習」, p. 387）。いずれの場合も、“〔道〕心ヲオコス”は「出家しようとする」を意味する。

このほかに“心ヲオコス”という表現が5個所で用いられていて、いずれの場合も“ココロ”は単一語であり、“ココロヲ-オコシ-テ”と助詞“テ”を伴っている（「夕顔」, 14, p. 162; 「明石」, 15, p. 59; 「若菜」下, 16, p. 366; *ibid.*, p. 380; 「夕霧」, 17, p. 128）。

この5例に見られる“心ヲオコス”を『日本古典文学大系』の『源氏物語』を校訂した山岸徳平は次のように解している。①「無理の御心を振り立たせる（元気を出す）」（14, p. 162, 頭注10）, ②「意気を奮い立てる」（15, p. 59, 頭注21）, ③「心を励ます（精根を尽くす）」（16, p. 366, 頭注4）, ④「非常な勇猛心を振り起す」（16, p. 380, 頭注9）, ⑤「一心不乱になって」（17, p. 128, 頭注6）。こういうことになったのは、用法成立の事情を調べなかったからであり、文脈をよく考慮しなかったからであろう。9)「仏教的な」文脈のみに用いられるとはいえ、日本文献に見られる“ココロヲオコス”は、仏教の“發心”とは用法が異なる。仏教文献に見られる表現「發〔菩提〕心」は、「〔真理に目覚めようとする〕心を発生させる」を意味し、動作主体は、「真理に目覚め〔て苦しみから解放されよう〕と決心する人である。しかしながら、そのような大それた決心をする者は、日本にはいるはずもなかった。

日本語の“心ヲオコス”では、二つの段階（「真理に目覚める」と「苦しみから解放される」）のうち、第1段階（「真理に目覚める」）が切り捨てられて、第2段階（「苦しみから解放される」）のみが残され、その仏教的意味合いも拭い去られた。日本語の“心をおこす”は、「ブツまたはボサツにすがって苦しみから解放されよう」と決心する、「ブツまたはボサツの救済を求めようとする」という意味で用いられている。ブツやボサツに緊急出動を要請して、窮地から救出させようとするのであり、真理に目覚めて無限に続く苦しみから解放されることは関心外であった。日本人がブツやボサツに期待したのは真理ではなく、究極の呪力であった。日本人にとって、

ブツやボサツは究極のヒジリであった。

いずれにしても、『今昔物語集』5.13の“マコトノ-ココロヲ-オコス”も、日本人から見れば、仏教的表現のつもりであり、“マコトノ-ココロ”は“ボダイ-シン”（菩提心）と同義である。

10) インド人が構想した体系では、身体が機能を停止しても、「心」は機能を停止しない。そして、身体が機能を停止した瞬間に、「心」はそこから離れて、縁もゆかりもない女または雌の体内で待機する。受精が行われる直後に、最初期の胚 (kalala) が発生した瞬間に、「心」がそれに侵入する。新しく侵入した身体は、それまで縁もゆかりもなかった女と男から生まれたものであるから、以前の身体と何の関係もない。「轉生」による「心」の継続は受精による遺伝子の継続とは全く次元を異にするのである。このように「心」が限りなく移動し続けるということは、生きる苦しみが限りなく続くということであり、これからの解放こそインド人にとって究極の目標である。

11) インド人にとって精神活動の主体は不滅のアートマン (ātman) である。喜ぶのも悲しむのもアートマンであり、善いことをするのも悪いことをするのもアートマンである。身体が死んでもアートマンは次の身体に移って活動を続ける。このように、アートマンが身体から身体へと無限に移動を繰り返すことを“[車輪のように]ぐるぐる回ること” (saṃsāra/輪廻) という。

アートマンが身体に結び付いていること、すなわち生きていることは苦しみである。無限に移動を繰り返すということは、無限に苦しみが続くということである。「ぐるぐる回ること」の恐怖から逃れること、すなわちアートマンが再び身体と結び付くのを阻止することを“解放” (vimokṣa/解脱) といい、そのために有効な方法を見つけだすことこそ、インドではすべての宗教と哲学にとって究極の課題であった。

仏教では実在が認められないので、アートマンの存在は否定され、身体の死を越えて次々と身体を移動し続けるのは「心」 (vijñāna/識) であると言われる。究極の真理を会得して「心」を消滅させることができれば、「ぐるぐる回ること」の苦しみから解放され、これに成功した人を“ブツダ” (buddha/佛陀) という。

12) ジャータカはシャーキャ-ブツダが前世で行ったことを述べた話である。数え切れないほど「轉生」して限りないほど生涯を繰り返した。人間であったり野生動物であったり、男であったり女であったりして、その一つ一つの生涯で驚嘆すべき「善い行い」を重ね、その結果として最も驚くべき「報い」を得てブツダになった。“ジャータカ”と呼ばれる文学ジャンルは、過去に通過した限りないほどの生涯でシャーキャ-ブツダが行った数え切れないほどの「善い行い」を集大成したものである。

13) *Jātaka* 3, ed. V. Fausbøll, London, 1883, p. 52: *dānaṃ dātabbam sīlaṃ rakkhitabbam uposathakammaṃ kātabban ti tinnaṃ janānaṃ ovādavasena dhammaṃ deseti.*

14) 名詞“pāra”（向こう岸）の対格形“pāram”に動詞語根“i”（行く）が付いて、形容詞“pāram-i”（向こう岸へ行く）が形成され、これにさらに接尾辞“-tā”が付いて形成された抽象名詞が“pāram-i-tā”であり、「向こう岸へ行くこと」を意味する。

「迷いの世界」の比喩である「こちらの岸」に対比して、「向こう岸」は「迷いのない世界」/「真理の世界」の比喩である。そして、「向こう岸へ行くこと」を意味する語“pāram-i-tā”が表すのは、もともと「真理の世界へ行く[ために実践する]こと」という抽象概念である。

この「真理の世界へ行く[ために実践する]こと」が抽象的な努力目標に留まらず、実際に行うべき項目が次第に設定されて、抽象名詞“pāram-i-tā”は「真理の世界へ行くための実践項目」を指すことになり、これが最終的には6項目に整理された。

なお、この“pāramitā”という術語は、中国では翻訳せずに音だけを写して“波羅密[多]”[pua-ld-miēt[-ta]]と言うのが普通である。誰も「真理の世界」へ行くつもりがない日本で、“ハラミツ”という借用語は「誰も意味を気にすることなく通用している語」の一つである。

『大智度論』によると、ブツダ自身がボーディサットヴァたちに6種のパラミターを教えたが、これはブツダを目指して頑張っている人々を励ますのに効果があるという(1, 『大正』25, p. 58, a)。「真理の世界へ行くための実践項目」が設定されて、具体的に努力すべきことが分かり、やり易くなったとみな喜んだのである。

6種の「向こう岸へ行く方法」(ṣaṭ-pāramitā/六-波羅蜜)うち、②「正しい生活態度をとること」(śīla/持戒)、⑤「精神を集中すること」(dhyāna/禪定)および⑥「究極の知恵を会得すること」(prajñā/般若)の3種は、古い時代から仏教で重んじられていた。「心掛け」が取り上げられているのは②である。

マハーヤーナ(mahāyāna/大乘)が唱えられるようになってから追加されたのは、①「[惜しみなく]人に物を与えること」(dāna/布施)、③「他人の不当な仕打ちに我慢すること」(kṣānti/忍辱)、④「苦難にめげず善い行為に励むこと」(vīrya/精進)の3項目であった。これはいずれも、他人の存在を前提にしたものである。

- 15) 『ジャータカ』に登場するジャッカルと川獺は、労を惜しんで食べ物を盗むのであるが、盗む前に“持ち主がいますか”と声を掛けて、所有者不詳の物を拾うだけと言い訳ができる状況を作っている。怠け者ではあっても、「心掛け」に違反すまいと細心の注意を払っているのである。怠け者であることがこれほど強調されているのは、未来のブッダである兎と差をつけるためである。

一方、日本の猿は木から果実を取るほかに、畑から野菜を多量に盗んでいるし、狐は供え物の残りを無断で取っている。しかしながら、いずれも言い訳がましいことを一切言っていない。「心掛け」など眼中にないからである。

- 16) 『今昔』5.13, pp. 365-366: 人ノ身ヲ受タリト云ヘドモ、[酷いことをするのが大勢いる。] 何况ヤ、如此ノ獣ハ、實ノ心深く難思シ。然レバ試ム。

- 17) 語合成“帝-釋”の“帝”は“天主帝”(神々の皇帝)の省略表現であり、“釋”はインドラのエピテート“śakra”(力強い[者])を漢字で表記した“釋迦羅”[ʃiek-kiā-lā]の第1字である(“帝-釋” < “天主帝-釋迦羅”)。

インドラを指す“帝釋”に“deva”(神)の訳“天”を付した語形が“帝釋-天”である(“帝釋-天” < “帝釋”+“天”)。仏教に採り入れられて真理の護衛役となったが、仏教パルテオンに属する他のデーヴァ(deva/天)や準デーヴァと同じように日本に行つてカミとなり、その彫像が数多くの寺院に置かれている。東大寺に伝えられるタイシャクテン像は天平時代の制作と言われ、身体に甲冑をまとい、武人であることを顕示して、ヴェエダ

## 兎が火に飛び込む話の日本版

で大活躍するインドラの面影をわずかに留めている。同じように、醍醐寺の木像も甲冑を着けている。

18) *Jātaka* 3, p. 53: mama santikam āgatānam yācakānam tināni dātuṃ na sakkoti, tilataṇḍulādayo pi mayham n' atthi, sace me sautikam yācako āgachissati attano sarīramamsam dassāmīti

19) 天にあるインドラ宮殿には特殊な装置が設けられていて、極端な「善い行い」が地上で行われると、インドラがいつも座っている座席の温度が上がる仕組みになっている。

*Jātaka* 3, p. 53: tassa silatejena sakkassa paṇḍukambasilāsanam unhākāram dassasi.

このような自動情報収集システムを用意しているのは、地上世界で行われる極端な「善い行い」をすべて把握しておく必要がインドラにあるからである。最上級の「行い」は最上級の「報い」をもたらす。そして、最上級の「報い」の一つに「インドラになること」がある。自分の身体を捨てようと思った兎は、遠い未来にインドラになろうとしているのかも知れない。

インドラは自己防衛を図ろうとしているのであり、その地位を脅かす可能性があるのは、極端な「善い行い」を行う者である。自分の身体をすっかり与えて食わせようというのであるから、この兎がしようとしているのは特に極端な「善い行い」であり、インドラではなくブッダになるつもりであると認定される。

20) 人間の行為は必ずそれにふさわしい結果をもたらす。これを“因果應報”と言う。人間が何かの「行い」(karman/業)をすると、それに対応する「報い」(phala/果)は、いつか必ず受けなければならない。そして、それはいつ現れるかも知れない。限りなく「轉生」を繰り返した後で、想像もできないほど遠い未来になってやっと現れるかも知れないのである。

このプロセスを説明するために、仏教では「[心の最深部に潜在する]特定のエネルギー」(śakti-viśeṣa)が構想された(*Abhidharmakośavyākhyā*, ed. U. Wogihara, p. 150)。人間が何かの「行い」をすると、その度に「特定のエネルギー」が発生して、本人が気づかないまま「心」(vijñāna/識)の最も深い部分に貯蔵される。時機が来ると、このエネルギーは現象化して、「報

い」として顕現する。

潜在意識に沈殿したエネルギーは植物の種に譬えられる。地中に埋まっている種は見えないが、いつか発芽して植物の姿をとるようになる。それと同じように、人間が何かをするたびに生じたエネルギーは、心の最深部に埋まっていて、その存在が分からないが、時機が来ると現象化して知覚できるようになる。

「特定のエネルギー」が蓄積される場所は「心」の最深部である。これは“定着場所としての「心」”/“定着場所である「心」(ālaya-vijñāna/阿頼耶-識)と呼ばれる。“[特定エネルギーの]定着場所であり、[8種類ある]「心」[の一つ]である”と言うのである。

21) 『今昔』, 5.13, p. 365.

22) loc. cit.

23) ibid., 6.19, 『古大』 23, p. 86.

24) ibid., 5.11. 『古大』 22, p. 363-364.

25) ibid., 5.13, p. 364.

26) ibid., 16.37, 『古大』 24, p. 497.

27) loc. cit.

28) 中国語訳の仏典が輸入された日本では、ヤクシ（薬師）やアミダ（阿彌陀）のようなブツも、クワンオン（観音）やミロク（彌勒）のようなボサツも、人間のマコトノココロに感じ入る存在となり、カミの仲間として大活躍する。そして、彫像を礼拝する習慣が伝わって、姿を目の当りにすることができたので、昔からのカミ-ガミ以上に頼りにされた。

日本文化圏で“佛教”と呼ばれている事象の実態については、“仏陀の教え。世界三大宗教の一つ”（『広辞苑』<sup>4</sup>, 1991, p. 2253, a）と定義すべきではなく、“ヤクシやクワンオンなど、異文化圏出身のカミの彫像の前で、マコトノココロを最大限に発現して願い事をする”と定義すべきである。

29) 『今昔』 10.19, 『古大』 23, pp. 303-304.

30) ibid., 10.19, p. 304.

31) ibid., 16.37, 『古大』 24, pp. 497-498.

32) 『日本霊異記』中39, 小泉道（校注）, 『新潮日本古典集成』 67, 東京,

1984, p. 197.

33) 『今昔』 5.13, p. 366.

34) *Abhidharmakośabhāṣya*, ed. P. Pradhan, Patna, 1975, pp. 181-182 (ad 3.93d-3.94a<sup>3</sup>): ……〔52桁〕 *daśa mahābālākṣāny asaṃkhyam* | (ブツダになるまでに経過する時間: 3 *asaṃkhyā kalpa* [1 *asaṃkhyā* = 10<sup>51</sup>])

1 *kalpa* = 432 × 10<sup>7</sup>年 (宇宙が発生してから消滅するまでの時間)

∴ 3 × 10<sup>51</sup> *kalpa* (三阿僧祇劫) = 1296 × 10<sup>57</sup>年

35) 『今昔』 5.13, p. 367.

36) *ibid.*, p. 366: 今, 我レ, 出デ, 甘美ノ物ヲ求テ来ラムトス。

37) 玄奘, 『大唐西域記』 7, 『大正』 51, p. 907, b.6-7: 劫初時於此林野有狐兔猿異種相悦

38) *loc. cit.*, b.15-17: 老夫謂曰 以吾觀之爾曹未和 猿狐同志各能役心 唯兔空返獨無相饋

39) *loc. cit.*, b.17-18: 兔聞譏議謂狐猿曰 多聚樵蕪方有所作

40) 『今昔』, 5.13, p. 366.

41) *loc. cit.*

42) このような文脈で用いられる借用語“リ-シャウ”(離生)の語義は、「生死を離れること」(『広辞苑』<sup>4</sup>, p. 2682)と定義することができない。その日本語訳“シャウヲ-ハナル”についても同じことが言える。

43) 仏教で伝えられる説話にはアヴァダーナ (*avadāna*) とジャータカ (*jātaka*) の2種類がある。ブツダ以外の人の前世が語られるアヴァダーナで「現在のこと」(*paccuppanna-vatthu*) に力点が置かれるのに対して、ブツダ自身の前世が語られるジャータカでは、「過去のこと」(*atīta-vatthu*) の方に力点が置かれる。

アヴァダーナの編纂意図は「行いと報いの対応法則」を教えることであり、いろんな者の前世が語られる。ジャータカではそれがシャーキャブツダの事例に限られる。前世で最も驚くべき「行い」を限りなく繰り返して最も驚くべく「報い」(ブツダになること)を受けた話であり、ジャータカの編纂意図はブツダを賛美することである。

44) 仏教説話は地の文と引用の文から成る。地の文は説話の冒頭と末尾にあり、その間に引用の文が挟まれる(地の文  $\alpha$ -引用の文-地の文  $\beta$ )。地の文

$\alpha$ で語られるのは「現在のこと」である。それに続いて引用の文で「過去のこと」が語られる。最後に地の文 $\beta$ で両者の対応が指摘され (samodāna), 「過去のこと」に登場する人物Aと「現在のこと」に登場する人物Bが同じであると説明される。

AとBが同一人物であるというのは、身体が同じということではなく、「心」が同じということである。途方もなく遠い過去にAの身体に宿っていた「心」は、身体から身体へ次々とを移動して、何万兆年か何億兆年あるいはそれ以上かも知れない時間を経て、遙か後に発生した瞬間の身体Bに侵入したのである。

45) 『今昔物語集』の5巻「天竺部」に採録された12の説話で、前世の人物が現在の人物と比定されている(7, 8, 9, 10, 11, 12, 14, 18, 21, 22, 26, 29)。どの話にも「杵物語冒頭」に当たる箇所がなく、第8話以外では“トナム語り伝ヘタルトカヤ”という常套句が末尾に付いている。

46) これは変わった毛色の鹿が救ってやった男に裏切られる話である。この鹿は溺死しかけた男を助けてやったことがある。ところが後になって欲に目が眩んだ男に裏切られて王の軍隊に捕らえられかける。

インドの山の中に、毛が九色で角が白い鹿が鳥といっしょに暮らしていた。ある日、この鹿は川で溺れた男を助けた。その時に、美しい皮と角を狙う連中から身を守るために、居所を告げないように鹿に約束させた。さて、その国の王妃が夢で九色の鹿を見て、その皮と角を欲しがった。王が懸賞金をかけたところ、鹿に命を救われた男は、約束を破って鹿の居所を告げた。軍隊がやって来るのを仲良しの鳥に教えられて、鹿は王にすべてを語った。以後は鹿を殺すことが禁じられた。

47) 『今昔』5.18, 『古大』22, p. 378: 然レバ恩ヲ忘ルルハ人ノ中ニ有リ。人ヲ助ケルハ獸ノ中ニ有リ。此レ今モ昔モ有ル事也。彼ノ九色ノ鹿ハ今ノ釋迦佛ニ在マス。心ヲ通ゼシ鳥ハ阿難也。后ト云フハ今ノ孫陀利也。水ニ溺レタリシ男ハ今ノ提婆達多也トナム語り傳エタルトヤ。

48) 仏教説話では必ずブッダが登場する。冒頭にブッダが登場した場面で起こった事がきっかけになって、それに関連する前世の出来事を思い出して語り始める。こういうことが可能なのは、ブッダが以前の生涯をすべて記

憶する超能力者であるからである。

49) アシュヴァゴーシャ (aśvaghōṣa) によると、シャーキャ-ブツダは母親マヤー (māyā) の脇から生まれたという (*Buddhacarita*, ed. E. H. Johnston, 1.9: pārśvāt suto lokahitāya jajñe)。膾を通過しなかったため、「誕生の苦しみ」(janma-duḥkha) を味わわずにすんだのである。

50) 「轉生」した後では前世の記憶は失われる。これは仏教だけで言われていることではなく、インド正統派でも広く信じられている考えである。インド世界で「轉生」が疑いようがない事実である以上、経験と矛盾があってはならない。「轉生」する前のことを覚えている人が現実にいない以上、記憶の継続を認めることはできない。インド正統派宗教の基本文献であるプラーナ (purāna) では、この問題が取り上げられて詳しく論じられている。

プラーナの記述によると、次の身体へ移っただけでは記憶を失うことがない。胚は成長して胎児になるが、母親の胎内にいる限り記憶は保持される。記憶の喪失は出産の際に起こる (*Mārkaṇḍeyapurāna*, ed. K. M. Banerjea, Calcutta, 1862, p. 83)。狭い膾 (yoni) を通る際の激痛に耐え難く、すべてを忘れてしまうのである。

51) 仏教でこのような「超自然力」が備わっているのは、究極の真理に到達したブツダの外に、アヴァローキタスヴァラ (avalokitasvara/観音) やガダガダスヴァラ (gadgadasvara/妙音) など、最高水準に達したボーディサットヴァに限られる。そして、このような「超自然力」を使うのは、もっぱら真理を説くのに効果的な状況を用意するためであり、個人的な目的を達成するためではない。これが仏教世界の約束事である。

仏教で構想された「超自然力」には6種類あると言われる: (1) 「思い通りにする知力」(ṛddhividhi-jñāna/如意通), (2) 「すべてのものを見抜く知力」(divyacakṣur-/天眼通), (3) 「すべての音を聞き取る知力」(divyaśrotra-/天耳通), (4) 「他人の心を見抜く知力」(paracetahparyāya-/他心通), (5) 「前世の生活を思い出す知力」(pūrvanivāsānusrīti-/宿命通), (6) 「煩惱を全て消滅させる知力」(āśravaksaya-/漏盡通)。

52) 『今昔物語集』5.13に伝えられる説話の冒頭に近い所で、3匹の獣が前世のことを思い出して、大いに反省をしている。“前世で我々は思いやりがなく、物を惜しんで人にやらなかった。そのため地獄へ落ち、今度は獣とし

て生まれた”と言うのである。

『今昔』5.13, p. 365: 各思ハク、我等「前世ニ罪障深重ニシテ賤キ獸ト生タリ。此レ、前世ニ、生有ル者ヲ不哀ズ、財物ヲ惜テ人ニ不與ズ。……」。

仏教文献では、このような言葉を人間以外の動物が言ったり思ったりすることはない。「以前の生涯」を思い出す獣など、どの仏教文献にも登場しないのである。

仏教文献で「以前の生涯」について語るのもっぱらブツダである。「以前の生涯」を思い出すことができるのは、ブツダとブツダに近い水準の人間だけで、並の人間にはそのような超能力が備わっていない。ところが、『今昔物語集』では兎や狐や猿が「以前の生涯」の思い出に耽っている。人間でさえできないことができるのである。ブツダ並の超能力を備えた兎や狐や猿がいるとすれば、仏教の立場から見て、これはもう「賤キ獸」ではなく、「前世ニ罪障重」であった結果ではありえない。

- 53) 『日本靈異記』上〔序〕, p. 24: なにぞ、唯し他國の傳録をのみ慎みて、自土の奇事を信け恐りざらむや。
- 54) 玄奘は629年に長安を出発して、4年がかりの長旅の後、インドに到着した。ナーランダ (nālanda) で5年にわたって学び、645年に657点のインド文献を長安に持ち帰った。その間に見聞きしたことを記録して、646年に旅行記『大唐西域記』12巻を執筆した。皇帝に命じられて、76点のインド文献を翻訳し、数千人もの人々を教育したといわれる。
- 55) 玄奘, op. cit., p. 907, b.5-26.
- 56) 『今昔』5.13, p. 365: 今昔、天然ニ兎・狐・猿、三ノ獸有テ……
- 57) 『ジャータカ』の「兎が火に飛び込む話」では、末尾で場面が再び前世から現在(シャーキャ-ブツダの時代)に変わり、ブツダが大勢の人々に話しかけている。前世に通じた超能力者として、前世物語の登場者と現在物語の登場者の対応関係を説明するのである。それによると、あの時の川獺は今のアーナンダ (ānanda/阿難) であり、ジャッカルと猿はそれぞれ今のマウドガリヤーヤナ (maudgalyāyana/目蓮) とシャーリプトラ (śāriputra/舍利弗) であった。そして、あの時の兎は今のブツダであった。

*Jātaka* 3, p. 56: tadā uddo ānando ahosi, sigālo moggallāno, makkato

兎が火に飛び込む話の日本版

sāriputto, sasapaṇḍito aham evā'ti.

アーナンダはシャーキャ-ブツダの付き人であり、シャーリプトラとマウドガリヤーヤナは一番弟子と二番弟子である。あの時に3匹の動物の身体に宿っていた「心」は、今はそれぞれ、シャーキャ-ブツダに最も親しい3人の身体に宿っているという。

- 58) 玄奘, op. cit., p. 907, b.5-6: 是如來修菩薩行時燒身之處
- 59) *Jātaka* 3, p. 55: pabbataṃ pīletvā pabbatarasam ādāya candamaṇḍale sasalakkhaṇaṃ ālikhitvā ……
- 60) Willem Caland, *Das Jaiminīya-Brāhmaṇa in Auswahl*, Amsterdam, 1919, pp. 13-14 (7 Der Hase im Mond): eṣa vai śaśo ya eṣo 'ntaś candramasy; eṣa hīdam sarvaṃ śāsty; eṣa vai yamo ya eṣo 'ntaś candramasy; eṣa hīdam sarvaṃ yamaty; eṣa vai mṛtyur yad yamo' tsyann eva nāma; tam eva tābhīr āhutibhīh śamayitvorjaṃ lokānāṃ jayati yamaṃ devaṃ; devānāṃ yamasya devasya sāyujyaṃ salokatāṃ samabhyārohati ya evaṃ vidvān agnihotraṃ juhoti.
- 61) ibid., p. 14, n. 2: Dies scheint die älteste Erwähnung der Volksmeinung zu sein, die in den Flecken auf dem Mond das Bild eines Hasen sieht. Freilich wird hier das Wort anders gedeutet.
- 62) 玄奘, op. cit., p. 907, b.22-24: 除燼収駭傷歎良久 謂狐猿曰 …… 不泯其跡 寄之月輪傳乎後世  
『大唐西域記』17の1節「烈士池」の末尾に近い所に、“彼の故に、<sup>あま</sup>威ねく言ふ。月の中の兎、斯より有り」と（玄奘, op. cit., p. 907, b.24: 故彼咸言 月中之兎自斯而有）という言葉がある。兎の驚くべく行為に感嘆して、インドラは記念事業を行った。「月に寄りて」兎の驚くべき行為を後世に伝えようとしたのである。そして、その時から月の中に兎がいるという。
- 63) loc. cit.: bodhisattam āmantetvā tasmim vanasaṇḍe tasmim yeva vanagumbe tarunadabbatāṇapitṭhe nipajjāpetvā ……
- 64) 『今昔』5.18, 『古大』22, p. 367.
- 65) 頭注, 『今昔』5.13, p. 365.
- 66) 「月ノ兎ノ事」, 『塵添囊鈔』14, 『大日本佛教全書』93, p. 148, b.
- 67) 良寛, 「月の兎」, 『近世和歌全集』, 『古大』93, p. 223.
- 68) loc. cit.

- 69) 鳩摩羅什, 『妙法蓮華經』, 『大正』9, p. 2, a.16: 爾時釋提桓因與其眷屬  
二萬天子俱復有名月天子普香天子 ……

*Saddharmaṇḍarīkasūtra*, H. Kern & H. Nanjio, St.-Petersbourg. 1912, p. 4:  
śakreṇa devānām indreṇa sārđhaṃ viṃśatidevaputrasahasraparivāreṇa | tad  
yathā | candreṇa devaputreṇa sūryeṇa cadevaputreṇa ……

“釋提桓因”: “śakreṇa devānām indreṇa” (神々の王インドラ) に対  
応

“復”: 訳者は “tad yathā” (すなわち次の通り) に対応させるつもり。

- 70) 『鶯林拾葉鈔』3, 『日本大藏經』, 『法華部章疏』3, p. a-b.  
71) 『今昔』5.13, p. 366: 猿ハ木ニ登リテ, 栗・柿・梨子・棗・柑子・橘・  
菰・椿・樛・郁子・山女等ヲ取テ持<sup>モテ</sup>來リ, 里ニ出テハ菰・茄子・大豆・小  
豆・大角豆・粟・稗<sup>キ</sup>・黍<sup>モテ</sup>ビ等ヲ取テ持<sup>モテ</sup>來テ, 好<sup>ジキセ</sup>ニ隨テ令食シム。狐ハ墓  
屋ノ邊ニ行テ人ノ祭り置タル桑・炊交・鮑・鰹, 種々ノ魚類等ヲ取テ, 思  
ヒニ隨テ令<sup>ジキセ</sup>食ルニ,

- 72) ジャッカルの肉食動物であり, 川獺はいつも魚を食っている。この話に  
登場するジャッカルの川獺は, いつも食っている動物を苦勞して捕まえる  
のではなく, 手っ取り早く盗んで来るのである。「盗まないようにする」と  
いう「心掛け」に違反するのだが, それを避けるために姑息な手を使っ  
ている。所有者が立ち去ったことを確かめた上で, 白々しく“誰か持ち主  
はいますか”と声を掛けした後で盗むのである。これで, 所有者不詳の物を  
捨得するということになり, 「心掛け」に抵触する事態を避けることができ  
ると思っているのである。

- 73) このように, ジャータカに登場するジャッカルの川獺は, 兎と同じよう  
に「[惜しみなく]物を与えること」という「心掛け」を実践しようとして  
いるのは確かであるにしても, 全力を挙げて頑張っているわけではなく, ひ  
どい手抜き作業をしている。猿は盗むわけではないが, 木に着いている果  
実を取るだけであり, 数が特に多いわけでもないのに, 大して手間はかか  
らない。

これに対して, 兎は自分の身体を与えようというのであるから, 「[惜し  
みなく]物を与えること」を実践するといっても, これは常軌を逸している。  
パーリのヴァージョンでは最初から兎と他の動物の間に越えられない断絶

## 兎が火に飛び込む話の日本版

が設定されているのである。そして、インドラの関心は兎に集中していて、テストの対象は初めから兎に限られている。何しろ一方は前世のブツダであり、他方は型通りに務めを果たす並の存在に過ぎない。

74) 『續日本紀』 17, 『國大』 2, pp. 196-197.

75) 『日本文徳天皇實録』 8, 『國大』 3, p. 86.

小林信彦, 「オホハラへの成立に關与した異文化文献 — ヤマヒとワザハヒを追加する際に使われた『藥師經』—」 (4), 『〔桃山学院大学〕総合研究所紀要』 29. 2, 2003, pp. 39-40.

76) *ibid.*, p. 103.

小林, *op. cit.*, pp. 40-41.

77) 『今昔』 5.13, p. 366.

78) 仏教の体系を理解しないまま仏教文献から借用した常套句が装飾用に用いられている場合を別として、この説話に仏教伝承との繋がりには認められない。“マコトノココロ”という語の意味を説明して、“まじめに仏道を志す気持”と言われるが(頭注4, 『今昔』 5.13, 『古大』 22, p. 365), “誠ノ心ヲ<sup>マコトノココロ</sup>蔽コシテ菩薩ノ道ヲ行ヒケリ”とあるように、マコトノココロを起こすことはボサツノダウを行う前提である。そうすると、「まじめにブツダウを志す気持」はボサツノダウを行う前提ということになる。語の意味は文脈の中で理解するという平凡な原則に忠実でありさえすれば、このような間違いは避けられたはずである。

## The Japanese Version of *Jātaka* 316: The story of a hare who did not strive to be a Buddha

Nobuhiko KOBAYASHI

In the story of *Jātaka* 316, a hare jumps into fire to offer his own body as broiled meat. This is a story of extreme self-sacrifice. The hare does this extreme act in order to satisfy a condition for becoming a buddha.

This story was transmitted to Japan and adapted as *konjakumonogatari-shū* (今昔物語集) 5.13. However, its keystone has changed. The Japanese hare is not interested in becoming a buddha. Instead, the hare aims to acquire *makoto-no-kokoro* (誠ノ心, sincere heart): one who is possessed of it is said to defer his own profit to the interest of others.